# 中学校社会科のグループ学習等における評価についての実践的研究

提案者　佐野市立西中学校　教諭
恩　田　宗　生

## 1　問題の所在

主体的・対話的で深い学びを実現させるために、本校社会科では、調べ学習・レポート作成やグループによる話合い活動に積極的に取り組んできた。

そのような学習活動が展開される中で、生徒たちは、講義型の授業に比べて意欲的かつ活動的に授業に臨んでいるように見受けられた。

しかしながら、そうした生徒たちの姿をどう評価したら良いのかについては、今後さらに考察を深めていく必要がある。生徒たちの具体的な学びの姿をどう評価して、生徒たちにどうフィードバックしていったら良いのか。

本研究は、社会科の授業で行われる調べ学習・レポート作成、及びグループによる話合い活動における指導と評価の一体化を実現させるための手立てを、実践の中から明らかにしようとしたものである。

## 2　研究の実際

### ⑴　生徒の実態把握

令和元年度に１年間かけて、「調べ学習・レポート作成、及びグループによる話合い活動が行われている時の生徒の望ましい姿はどのようなものか」という視点で授業に臨み、活動中の生徒の実態把握に努めた。その結果をまとめたものが次の表である。

| | 調べ学習・レポート作成時 | グループによる話合い活動 |
|---|---|---|
| 望ましい姿 | 取掛かりが早い<br>じっくり黙々と取り組んでいる<br>眼差し・表情・佇まいが知的である<br>大作を作ろうとする意欲がある<br>教師への積極的な質問がある | 机にかじりつくように取り組んでいる<br>身を乗り出すように取り組んでいる<br>メンバーの身体（特に顔）の距離が近い<br>眼差しや表情が知的である<br>質問や教え合いがある<br>積極的に発表資料を作成している<br>作業を分担し合っている<br>資料にじっくり当たっている<br>教師への積極的な質問がある<br>発表者になる |
| 課題が残る様子 | 無駄話<br>学習と無関係の資料検索・行動<br>出歩き<br>無用の席移動 | 無駄話<br>その時の学習課題と無関係な行動<br>無用の出歩き<br>手いたずらに興じる<br>グループとの身体的・精神的距離が遠い<br>グループに正対しない |

⑵　評　価

上記の実態を踏まえて、令和２年度から下図のような評価シートを用いて、実際に評価を行うこととした。

| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 15 | 16 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 番号 | グループ活動時 | 関心・意欲・態度 | | | | | | | | | | | | | 思・判・表 | |
| | | ○机にかじりつくような、身を乗り出すような取組み | ○メンバーの身体の距離が近い | ○知的な眼差し・表情 | ○質問・教え合い | ○積極的な資料作成 | ○作業を分担し合う | ○資料にじっくり当たる | ○教師への積極的な質問 | ○発表者 | ✓無駄話 | ✓その時の学習課題と無関係な行動 | ✓無用の出歩き | ✓手いたずら | ○リーダーシップ | ✓グループとの距離 |
| 1 | 生徒氏名 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ・・・ | | | | | | | | | | | | | | | | |

授業者は、調べ学習・レポート作成、及びグループによる話合い活動が行われている時に評価シートを携えながら生徒の様子を見取るようにした。上記は「グループ活動時」に使った評価シートで、実際にはこの他に、「調べ学習・レポート作成時」に使う評価シートも作成した。

3　成果と課題

⑴　成　果

本研究の成果は次の３点である。

１点目に、授業者の「生徒を見る目」が鍛えられたことである。これまでは、漠然とグループ活動をさせていても、生徒たちの何が良い状態でどんなことに課題が残るのかが分からないことが多かった。本研究で作成した評価シートを用いることで、良いグループ活動の様子とはどのようなものかを明確にした上で授業に臨むことができるようになった。

２点目に、授業者と生徒とで共通の「ものさし」をもつことができたことである。評価シートを活用することで、授業や単元の最後に生徒たちに適切なフィードバックをすることが可能になった。そのことによって、授業者と生徒が同じ方向を向いて学習を進めることができるようになった。

３点目に、教員間での共通の「ものさし」をもつことができたことである。これまで評価しづらかった生徒の活動の様子を、この評価シートを用いることで複数の教員が同じ目線で評価できるようになった。

⑵　課　題

本研究の課題は、次の２点である。

１点目に、本研究で考えてきたことを教科等を越えてどう広めていくか、ということである。本研究は社会科での実践を基に進めてきたものだが、他教科等においても汎用できる内容を含んでいる。今後は、学校の教育活動全体の中でそれをどう活用していくのかについても考えていきたい。

２点目に、「本研究において評価しようとしてきた生徒たちの姿」と「社会科ならではの望ましい生徒の姿」はどのように関連しているのか考える必要がある、ということである。他教科等においても汎用性が高いということはそれだけ社会科という教科特有の評価にはなっていない、ということになるからである。

## 4　おわりに

社会科の評価について３年間かけて実践的に考えてきたが、現在は、「本研究で行ってきたことは、果たして社会科の評価に関することなのだろうか」という疑問が残っている。一方で、他者との協働が必要不可欠な世の中にあって、本研究で考えてきたことを社会科の評価の対象とすることには意味があることのようにも思われる。この辺りのことをどう考えたらよいか、自分の中でもう少しクリアにしていきたいと考えている。